

に據つたものと思はれる。

移鼠(121、124)。²³ **yi-šyo* の二字はイエスを寫したものである、此の名は一神論には「翳數」、摩尼經典には謂はゆる波斯經殘經にも下(?)部讚にも共に「夷數」で寫されてゐるが、シリヤ語ソグド語の *yiso*、ペーラ語の *yiso* などに對應するものである。

迷師訶(124)。²⁴ *niei-si-za* の二字はいうまでもなくメシヤに當り、シリヤ語ソグド語の *msiha*、ペーラ語の *masiha* 等に對應する形である。景教碑や三威蒙度讚には彌施訶、一神論には彌師訶と記してゐるが、此の殘經にも卷初の2行を始め、127行以下には皆一神論と同じく彌師訶で寫してゐる。かく此の殘卷中にメシヤの如き肝要なる語を、或時には迷師訶、また或時には彌師訶と寫し、一定の文字を用ひないことは、甚だ奇異に感じられるかも知れないが、要するに之は兩音の同一、もしくは相近かつたが爲に生じたことで、今音は勿論兩者同じであるが、中古音は、彌は廣韻に武移切、集韻に縣披切と見えて居つて甚だ相近い。Karlgrén氏は迷に *niei*、彌に *njie* の音を與へてゐる。それで元來漢字の使用に熟達しなかつた人の書いたものと見れば決して無理ではないし、或はまた轉寫の間に、同音たるの理由によりて生じたこととも見得られよう。

かく考へ定めた後に、こゝに此の殘卷の經題について攷究するのを便利とする。前述の通り經題は1行に序聽迷師所經と記さるゝものであるが、迷詩所の三字の中、「迷」と「彌」とはかく此の經中に於て同音を寫すに用ひられてゐるのであるが、次の「詩」は國音に於ても師と同一音であり、洪武正韻にも兩字に對して共に申之切の音を與へてゐるが、唐韻には詩を書之切、集韻には申之切とし、師を唐韻には疎夷反、集韻には霜夷切として居る。